

宮城県に住むムスリムたち

西 川 慧
艾 煜

1. はじめに

本稿の目的は、宮城県在住のムスリムたちの生活と語りに注目することで、彼／彼女らにとっての東北に生きる経験とはいかなるものなのか考察することである。

宮城県内に在住するムスリムたちのバックグラウンドは、それぞれ異なっている。国籍だけ見てもパキスタン、バングラデシュ、インドネシア、エジプト、サウジアラビアといったムスリムがマジョリティを占める国々からやって来た人もいれば、改宗を果たした日本人もいる。また職業を見ても、学生や自営業のほか、技能実習生として来日した人びともいる。このように生まれ育った場所や職業が異なる彼らを「宮城県に在住するムスリム」として一枚岩に描くことはできない。そこで本稿ではムスリムたちの日常を描くことで、ムスリムが暮らす場としての東北地方の特徴を逆照射してみたい。

まず滞日ムスリムに関する研究の蓄積について確認しておこう。滞日ムスリムに関する研究が始まったのは、主として1980年代に外国人労働者が流入して以降である。日本はパキスタン・バングラデシュ・イランといった国々と二国間の査証相互免除協定を結んでいた。それゆえ、上記の国々からやって来たムスリムたちはビザなしで日本に入国することができたのである。当時の日本はバブル経済に沸いており、労働力不足の状態にあった。ムスリムたちは工場や工事現場で働く労働者となった。来日したムスリムの大多数は男性である。このため当初の滞日ムスリムの研究は「外国人労働者」研究という側面が強い（樋口ほか編2007）。

やがて査証相互免除協定が終了すると、多くのムスリムたちは帰国していった。しかし、なかには日本人の配偶者を得て定住しはじめた人びとも多い。例えばパキスタン人は独自のネットワークを生かして中古車輸出業に従事するようになっていった。そのため彼らの事業をエスニック・ビジネスとして分析する研究（福田2007）や、彼らと婚姻した日本人女性たちの宗教経験に関する研究（工藤2008）が登場する。またモスク建設にまつわるムスリムたちの研究もある（岡井2007）。

外国人労働者以外に、「留学生10万人計画」（1983年）、「留学生30万人計画」（2008年）を受けてイスラーム諸国からの留学生も増えていった。それに合わせて、ムスリムの留学生たちの生活・宗教実践に注目する研究も現れるようになった（服部2007；荒木2016）。

このように、滞日ムスリムをめぐる研究は「外国人労働者」研究からイスラーム研究へと重点を移していったと言えよう。しかし、東北地方に在住するムスリムたちの研究は極めて少ないと言ってよい。以上の研究はムスリムの数が多い関東圏が主であり、日本の地方社会におけるムス

リムの生活を反映したものだとは言い難い。本稿著者の1人西川の論考(2012)もインドネシア人ムスリムのみにも焦点を置いたものであるし、ラムダニ(2018)の論考も留学生の宗教活動に限られている。つまり宮城県のような東北の地方社会におけるムスリムたちの生活をめぐる俯瞰図を提供するような研究は皆無と言えよう。本稿ではムスリムの視点から見た宮城県の特徴について検討することで、ムスリムたちにとっての東北を描き出していく。

2. 宮城県におけるムスリムの概況

まずは宮城県に住むムスリムたちの性質について確認しておこう。店田(2015)によると、現在の日本における外国人ムスリムの数はおよそ10万人である。彼/彼女らの配偶者である日本人ムスリムやその他の日本人ムスリムは合わせて1万ほどであると考えられるので、総計約11万(全人口の0.08%)のムスリムが日本に暮らしていると予想される(店田2015)。

それでは東北、宮城ではどうだろうか。2018年末の東北6県に在留する外国人数は合わせて6万120人であった。日本全国に在留する外国人の総数273万1093人のうち、わずか約2.2%である(法務省2019b)。東北6県のなかで外国人の人数が一番多いのは宮城県で、2万1614人があった。国籍別のデータから見ると、宮城県に在住している外国人のうち、多いのは中国、韓国、ベトナム、フィリピン、ネパールの出身者であり、合わせて総数のおよそ7割を占めている。その一方、インドネシア、バングラデシュ、エジプトなどムスリムがマジョリティになっている諸国の出身者の数は1739人で、総数の約8%であった(法務省2019b)。彼/彼女たちは全員ムスリムとは限らないが、その他の国からムスリムが来日することもあるし、日本人のムスリムもいるため、実際のところ一定数のムスリムが滞在していると推測できる。それでも日本全体の滞日ムスリムの数と比較すれば、宮城県内に住むムスリムの数は極めて少ないと言えるだろう。宮城県においてムスリムは圧倒的なマイノリティなのである。

次に滞在許可別に見ていこう。まずは留学生である。宮城県に在住している外国人留学生の人数は5014人であり、宮城県の外国人総数の約23.2%を占めている。つまり、宮城に住んでいる外国人の4人に1人が留学生なのである。この比率は、大分(28.92%)、福岡(25.88%)に次いで全国の第3位を占めており、全国平均の12%に比べて2倍ほどである。宮城県は全国的にも留学生が多い県であることが分かる。本論で例としてあげる東北大学では留学生の総数は2162人である。そのうちムスリム人口の多い国々からの留学生数は268人であり、なかでも多いのはインドネシア出身の留学生で、137人である(東北大学2019)。

次に技能実習生の数を見てみよう。2018年末時点で、全国に約32万8000人の技能実習生が在留している(法務省2019a)。そのうち、宮城県内の技能実習生の数は3676人、インドネシア人の技能実習生の数は577人である(宮城労働局2019)。残念ながら、他のムスリムがマジョリティとなっている国についての情報は分からなかった。

また南アジア出身者に限ってみれば、宮城県内のバングラデシュ国籍保持者は221人、パキスタン国籍保持者は295人である(法務省2019b)。東北大学の留学生ではバングラデシュ出身者が

36人、パキスタン出身者が15人であった（東北大学2019）。留学生以外の人びとの多くは、福田（2007）の事例のように中古車輸出業や、飲食店・食料品店を経営している人物、およびその親族だと考えられる。

このように、宮城県内に住むムスリムの数は極めて少ないと言える。そのうちインドネシア人は留学生と技能実習生に多く、バングラデシュ人やパキスタン人はそれ以外の在留資格で滞在していることが分かる。残念ながらバングラデシュやパキスタンの人びとに関しては調査を行っておらず、本稿では主として取り上げないことを明記しておきたい。それゆえ、以下では留学生と技能実習生として宮城県に滞在するムスリムの生活について見ていきたい。

3. ムスリムたちの組織

まず確認しておきたいのが、ムスリムたちが運営・関与する組織である。移民研究の文脈では、現地社会で生活をしていくうえで同郷組織や宗教組織が相互扶助や情報交換の場を提供していることが指摘されてきた（樋口ほか編2007）。宮城県のムスリムの場合においても、イスラームに関する組織、および出身国ごとの集まりが彼らの生活を支えている。

ICCS

宮城県のムスリムたちの宗教生活において中心的な役割を果たしているのが仙台イスラーム文化センター（Islamic Cultural Center of Sendai、以下ICCSと記す）である。ICCSは1977年、東北大学で学ぶ留学生と日本人の改宗者によって設立された¹。当初はビルやアパートの一室を借りて礼拝やアラビア語講座などを行っていた。やがて東北大学の留学生の数が増えるにつれて手狭になり、郊外に土地を購入してモスク（仙台マスジド）²を建設した。土地の購入費用と建設費は、日本各地のムスリムたちのネットワークを通じた寄付から捻出された（ラムダニ2018）。

仙台周辺に住むムスリムはICCSの会員になることができ、会費として月1000円を支払う。会費は仙台マスジドの光熱費などに使われる。ICCSは毎週土曜日にイスラームの勉強会を行っており、参加を希望する人物は誰でも参加することができるようになっている。

ICCSの重要な役割は、イスラミック・センター・ジャパンや日本ムスリム協会など日本国内のイスラーム関連組織・団体と関係を取り結ぶ拠点となっていることである。そのため、日本語で書かれたイスラームに関する出版物やパンフレット、日本で生活していくうえで必要となる情報をまとめた冊子やカレンダーが集まってくる。ただし、日本国内のモスクはそれぞれ独立した性格を持っている。すなわち全国のモスクを統括する組織があるわけではない（店田・岡井2015）。ICCSではイスラームへの入信、イスラームにもとづいた婚姻契約に際して独自の証明書を発行している。まさにICCSは宮城県内のムスリムをコミュニティとして結ぶ拠点であると言える。

TUMCA

東北大学のムスリムの学生団体が「東北大学イスラーム文化協会」（Tohoku University Muslim Cultural Association、以下TUMCAと略す）である。TUMCAは、イスラームの文化を日本人びとに紹介することを目的として、2006年に設立された。活動が滞っている時期もあったが、近

年では東北大学留学生協会が主催する「東北大学国際祭り」でイスラームに関する交流ブースを設置したり、仙台マスジドでBBQパーティを行ったりすることで、日本人がイスラームに触れあう機会を提供している。後述するように、インターネットテレビ会社と協同するなど、外部とのつながりを積極的につくっている点がTUMCAの特徴である。

TUMCAはムスリムと日本社会のつなぎ役のほか、ムスリムの学生内での情報共有の役割も果たしている。例えば、ムスリムの生活に関わる仙台の情報をまとめた英語冊子Guide for Muslim in Sendaiを編纂しFacebookページで共有することで、新たに東北大学にやって来た留学生たちが困らないようにしている。

KMIS

ICCSやTUMCAが国籍の別を問わずに参加できる組織である一方、国籍別の組織もある。インドネシア出身のムスリムたちは、「仙台インドネシアン・ムスリム家族」(Keluarga Muslim Indonesia di Sendai、以下KMISと略す)を結成している。インドネシア出身の人びとの組織として「インドネシア学生協会仙台支部」(Persatuan Pelajar Indonesia di Sendai、以下PPISと略す)という組織もある。PPISの場合、参加要件はインドネシア人の学生であることのみで、宗教は問わない。それゆえ、多くの非ムスリムの会員も参加している。一方、KMISに参加しているのはムスリムのみであり、かつ学生だけでなくインドネシア人の実習生たちも構成員に含まれている点が特徴である。ただし後述するように、近年では実習生たちは自分たちの組織を持ち、KMISとは独立して活動している。

KMISの主たる活動はインドネシア語で行うイスラーム勉強会だ。勉強会では、インドネシアや日本国内に住む講師を招いて特定のトピックに関するディスカッションを行ったり、クルアーンの節を詠唱し意味を学んだりしている。また、構成員の子どもたちへクルアーンの詠み方を教える活動も毎週行われている。さらに構成員たちが寄稿する電子メディアや、インターネットラジオ放送も行っている。以上の活動は、東北大学の留学生寮がある三条町周辺、もしくは仙台マスジドで行われている。

このように国籍を基準とした集まりは、それぞれのライフスタイルに合わせて、自らの母語でイスラームについて語ることができる場を提供している。KMISの会員たちの多くは東北大学の学生であり、英語でのディスカッションも十分に理解できる。そのため、別の国のムスリムとのコミュニケーションの面だけで言えば、必ずしも国籍を基準として集まる必要はない。しかし同じムスリムとは言え、食習慣や生活スタイルも違うため、KMISのように国を基準とした組織が必要なのだろう。今回は調査できなかったが、マレーシアの人びとも同様に国籍別の組織を有しているようである(ラムダニ2018)。

東北家族

インドネシア人の組織として、先述したKMISとは別に、「東北家族」(Keluarga Tohoku)がある。東北家族は2009年に設立され、当初は9人であった会員も、現在では600人を超えるという(じゃかるた新聞2019b)。その会員の大部分はインドネシア人の技能実習生だ。設立の中心

となったのは、日本人の女性と婚姻したインドネシア出身の男性2人であった。リーダーを務める設立者の男性によれば、学生たちが主であるKMISとは別に、技能実習生たちの関心に沿った組織が必要だと考えたことが設立のきっかけだという。

東北家族の主な活動は、年に4、5回行われる集まりである。春には桜の名所である大河原町で花見を行っている。このイベントでは、実習生を受け入れている中小企業の社員も参加して食事の提供をしている様子も見られた。また年末にはスキー・スノーボード、インドネシアの独立記念日（8月17日）にはそれを祝うイベントも行っている。さらに重要な集まりは年度末と夏前に行われるイベントである。このイベントは、実習を終えて帰国する人びとの「お別れ会」も兼ねている。「お別れ会」にはKMISから必ず数名の参加者が参加しており、現在に至るまで交流が続いている様子が見受けられる。

東北家族の活動の特徴は日本の地域社会からの関心の高さである。例えば「お別れ会」には地元の新聞社やテレビ局、インドネシアに拠点を置く「じゃかるた新聞」の取材や、宮城県国際化協会の関係者、そのほか実習生との関係者の日本人もやって来る。技能実習制度については、その運用をめぐる批判もあるため、日本社会側の関心も高いのだろう。

このように、宮城県内のムスリムのための組織には、ICCSやTUMCAといったイスラームを基盤としたものと、KMISや東北家族のように国籍別のものがある。これら2種類の組織の活動範囲は重なり合っており、協同しながら宮城県内のムスリムの活動を支えている。例えばTUMCAが作成した冊子Guide for Muslim in SendaiにはKMISの名も記されており、両者が協力して作り上げられたものであることがうかがえる。またKMISの活動も仙台マスジドで行われている。つまり、宮城県内のムスリムの生活は複数の組織に支えられたうえで成り立っていると言えるだろう。

それでは実際にムスリムたちはどのように生活しているのだろうか。次に、この点について見ていこう。

4. 礼拝

よく知られているように、ムスリムたちは一日5回、礼拝を行う義務を負っている。礼拝は基本的にはどこでも行うことができるが、その前に浄めを行わなければならないこと、および人前では目立ってしまうために、専用の礼拝場所があることが望ましい。そこで、まずは宮城県のムスリムたちが日々の生活のなかでどのように礼拝を行っているのか見ていきたい。

まず押さえておかなければならないのは、礼拝施設モスクである。東北地方にあるモスクの数は、筆者たちが確認できた範囲で、2019年12月現在、5つであった。すなわち岩手県盛岡市の盛岡マスジド、宮城県気仙沼市のワルン・マハル、仙台市の仙台マスジド、宮城県大衡村のマルハバ大衡マスジド、福島県いわき市のいわきマスジドだ。以下では、宮城県内のモスクを中心にいくつかの礼拝場所について記述しつつ、ムスリムたちがどのように礼拝を行っているのか見ていく。

仙台マシジド

仙台マシジドは仙台市の中心部から車で30分ほどの距離に位置している。周囲には駐車するスペースもある。仙台マシジドの内部には、礼拝前に浄めを行う場所、および男女別の礼拝室がある。礼拝室の男女の境は移動できるようになっており、男性が多く集まるイベントの場合には、境を取り払って全体を使用する。また中にはクーラーなどの書物や、イスラームに関するパンフレットも置かれている。清掃など建物のメンテナンスは、出身国ごとに担当を決めて行っている。

仙台マシジドでは金曜礼拝が行われている。ムスリムの成人男性たちは金曜日の昼の礼拝をモスクにて集団で行わなければならないとされている。これが金曜礼拝である。金曜礼拝では、説教と全体での礼拝が行われる。説教はモスクに集まる人びとのなかから週ごとに担当を決め、担当者自らが内容を考えて行う。モスクに集まる人の多くは外国人であり日本語を十分に理解しない者もいるため、説教は英語で行われる。金曜礼拝の際には建物一杯に人が入る。また夜の礼拝の際には有志が集まって集団礼拝も行われている。その際は日本人ムスリムの男性による車での送迎が行われる。

仙台マシジドでは断食月明けの礼拝や犠牲祭の礼拝も行われる。この場合には人が入りきらないため、外にビニールシートを敷いて礼拝を行う。人が多く集まる際にはインド・パキスタン料理店のワゴンがやって来て、料理の販売が行われることもある。



写真1 仙台マシジドで礼拝する様子
(2019年8月11日 筆者撮影)

仙台マシジドに集まるのは、東北大学の留学生や仙台周辺に住むムスリムたちである。ただし町の中心部や東北大学のキャンパスから離れた位置にあるため、車や原付バイクなどがなければ、1時間に数本のバスに乗っていくほかない。東北大学の川内キャンパスから仙台マシジドまでは、車で約15分ほどである。そのため、金曜礼拝のように人が多く集まる際には、誰かの車に

便乗して向かうことが多い。それでも仕事や学業のために仙台マシドまでやって来ることができないムスリムたちも多い。その場合、彼らは以下で記すマルハバ大衡マシドや東北大学川内キャンパスのような場所で礼拝を行っている。

マルハバ大衡マシド

マルハバ大衡マシドは、2014年に大衡村周辺に住むパキスタン人たちが中心となって設立したモスクである（大澤2019）。大衡村周辺に住むムスリムにとって、仙台マシドは遠すぎたために設立されたようである。

東北大学

東北大学や仙台市内の専門学校へ通っている学生たちにとって、金曜礼拝の度に仙台マシドへ通うことは困難を伴う。礼拝は12時半前後に行われるために、礼拝を終えてキャンパスへ戻るころには昼休みが終わってしまうからである。そこで、現在では東北大学の川内キャンパス内の一室を一時的に借りて金曜礼拝が行われている。金曜礼拝が行われる建物内のトイレには、浄めを行うのに適した手洗い場もある。

国立大学である東北大学は正式にムスリムたちの礼拝所を設置することはできていない。政教分離の原則に従う必要があり、特定の宗教のための施設を敷地内に設置することができないからだ（ラムダニ2018）。ただし、キャンパス内にはインフォーマルなかたちで礼拝用のスペースを確保しているケースが見られた。例えば工学研究科や歯学研究科では、浄めを行うことができるシンクのある部屋が使用されている。礼拝用のマットと、礼拝の方角を知らせるコンパス、女性用の礼拝服なども常備されている。特に女性たちは、金曜礼拝のようにモスクにおいて礼拝を行う義務はないため、大学構内や自宅で礼拝をすることが多い。

例えばサウジアラビア出身の女性Sさんが在学している歯学研究科の建物には「留学生活動室」がある。外側から見ると普通の交流室だが、中に入ると、およそ10平方メートルの部屋で、洗い場もついている。「礼拝所」を意味するMushollaと書かれた板がドアの内側に貼られている。また部屋には清掃スケジュールが書かれた紙も貼られており、利用する学生たちが交代で清掃を行っていることがうかがえる。Sさんが大学にいるあいだは、この両学生活動室で礼拝をする。他にこの研究科周辺で学ぶムスリムたちも、男女を問わずにこの部屋で礼拝をするのだという。



写真2 「留学生活動室」ドアの内側
(2019年6月27日 筆者撮影)

また工学研究科のムスリムたちは、学生が共同利用できる部屋を礼拝のときにだけ一時的に使用している。イスラームにおける礼拝は一人でも行うことができるが、共同で行った方が良いとされている。それゆえ、研究科によってはmessengerなどのアプリを使って各自の都合を合わせ、可能な限り共同での礼拝を行っている。

ワルン・マハル

ワルン・マハルは気仙沼市に設置されたインドネシア料理店である。店の隣には礼拝場所となるモスクが併設されている。気仙沼には200人を超えるインドネシア人技能実習生が住んでいる。また港町ということもあり、寄港する船のなかにはインドネシア人の船員が多く乗り合わせていることもある。インドネシアとの縁の深さから、気仙沼では毎年「インドネシア・パレード」を開催している。実習生のほか、地元の人びとも一緒になってインドネシアの民族衣装を着て街なかを練り歩くイベントである。

ワルン・マハルは、気仙沼市に本社をもつ土木工事業の会社によって設立された。この会社は数名のインドネシア人実習生を受け入れており、彼らが集まることができる場所をつくるためにワルン・マハルを設置した。気仙沼から仙台マスジドまでの距離は遠く、金曜礼拝のときなどに仙台まで行くことは難しい。そのため、福利厚生の意味も込めて礼拝施設を設置したのだという。飲食店のシェフは日本人であるが、いわゆる「本場の味」に近づける努力がなされている（じゃかるた新聞2019a）。

ただし、気仙沼市周辺に住む実習生たちは、必ずしもワルン・マハルの礼拝室で金曜礼拝を行っているわけではない。昼の休憩時間に職場を出てワルン・マハルで金曜礼拝を行うと時間がかかりすぎるからだ。また日々の礼拝には、仕事場の休憩時間を利用している。ただし必ずしも丁度良い時間に休憩に入れるわけではないために、困難を感じる場面もあるようだ。

その他

宮城県のムスリムたちが日常的に使用している主な礼拝場所は以上である。大学周辺など、ムスリムたちが普段生活している場所の内部や近くに礼拝場所が設置されていることが分かるだろう。一方で、そこから離れると礼拝場所を見つけるのは困難となる。現在のところ、大学を除いた公共施設に礼拝場所があるのは、仙台空港のみである。そのため買い物などで仙台の市街地へ出ると礼拝場所を確保するのは難しく、公共施設や商業施設の空きスペースなどでこっそりと礼拝を行っている。

この状況を打開しようと、TUMCAは、インターネットテレビ会社の協力のもと、宮城県と仙台市に対して仙台駅周辺に礼拝場所の設置を求める請願書を提出した。しかし、政教分離の原則に抵触してしまうため、および仙台駅はJRの所有物であるために、要望に応えることは難しいようであった（ラムダニ2018）。それでも指摘できるのは、ムスリムたちは組織を通して自分たちが生きやすいように自ら行動していることである。

5. 食事

次に確認しておきたいのはムスリムたちの食事である。よく知られているように、ムスリムたちが食べて良いとされているのは「ハラール」という範疇にある食べ物である。ハラールとは「許容されたもの」を意味し、本来は食べ物だけでなくムスリムの行為すべてに関わる観念である。ただし近年では滞日ムスリムやイスラーム諸国からの観光客の増加を受けて、主に食べ物をめぐるハラールの認証機関が誕生している。特に肉類はアッラーの名のもとに屠殺されたものが基本的にはハラールとされるために、認証を受けた肉と、それを使用した料理を販売する店が現れるようになった。非ムスリムが多数派を占める日本において、ハラールの認証はムスリムたちが食事を選択する際に重要な意味を持っている。

ハラール認証が得られた食材を販売する店舗は宮城県内に数店舗ある。ムスリムが経営する食品店のほか、業務用の食品を販売するスーパーマーケットなどだ。またインターネットショッピングを通じてハラール認証の得られた食品を購入することもできる。ムスリムたちはこれらの店舗を利用して日々の食材を手に入れている。

サウジアラビア出身の大学院生Sさんは、大学から徒歩10分のところにあるアパートで暮らしている。それゆえ平日の食事は上記の店舗で購入した食材を使って自炊している。ムスリムたちが自炊している背景には、ハラールの問題のほかに、母国での食事を作ることができるという理由もあるだろう。また、東北大学であれば学生食堂にハラール・メニューが準備されていることもあるので、利用する人物も多い。

一方で難しいのは外食である。宮城県はMuslim Travel Guide to Miyagiを発行し、ハラールの認証を受けた食事を提供することができるレストランを紹介している。そこで取り上げられているのは、観光案内ガイドという性格もあってか、仙台市中心部のホテル内のレストランや、観光地周辺の食事処などである。また普段使いできるものとしてはインド料理屋などが多い。つまりハラール認証を受けた食事を提供する店舗のみ



ハラール料理の提供をお願い

- 1.以下の材料を含んでいない料理。
 - a. 肉類（魚介類を除く）
 - b. 上記の肉類や油脂に由来した添加物（乳化剤やマーガリン）
 - c. 酒類（料理酒やみりん）
- 2.上記の材料を含んだ料理と一緒に調理されていない。
- 3.洗剤で洗った調理器具および食器を使用する。

✗  豚肉	✗  牛肉	✗  羊肉	✗  鶏肉
✗  ショートニング ラード	✗  アルコール 飲料	✗  ゼラチン	○  牛乳&卵

muslim.tohokuuniv@gmail.com  <https://www.facebook.com/TUMCA>

図1：ハラール・カード
(Indonesian Moslem Family in Sendai (KMI Sendai) and
Tohoku University Muslim
Cultural Association (TUMCA) 2019: 46)

であれば、選択肢は極めて限られていると言える。

そこで、ムスリムたちは店に入ってから自分たちで成分表をチェックし、食べることができるか否かを判断している。例え日本語を十分に話せなくとも、TUMCAが作成した「ハラール・カード」を提示することも出来る。ハラール・カードにはムスリムが食べることが許されない食品が書かれており、それを店員へ提示することで確認することができるのだ。ハラール・カードでは肉類、および肉類を使用した添加物、みりん等を含むアルコール類が許されない食べ物として記されている。これはTUMCAのハラールに関する理解を反映したものと言えるだろう。ただし、ムスリムによってはハラール認証を受けていない鶏肉や牛肉を食べても良いと考える者もある。確認した情報は、「あそこの店のあのメニューは大丈夫」といったように、ムスリム同士の間でシェアされている。それでも、人によって基準が異なることもあるために、こうした情報に対しては疑問を持っている人びとも少なくない。

仙台で暮らしているムスリムたちが一番よく行くレストランとも言えるのがインド料理店である。インド料理にはもともとベジタリアン向けのメニューが多く、ムスリムも問題なく食事できる。またハラールの食品を扱う店の多くは南アジア系の人びとによって営まれているため、スパイス等も取り扱っている（樋口2007）。多くのインド料理店がハラールの食品を使用しているのは、これらのハラールショップから仕入れているからだと考えられる。なかにはバングラデシュ人やパキスタン人が経営する飲食店もあり、そこはムスリムたちが最も安心して食事できる場所となっている。店の外にハラールのマークがついていなくても、店員に聞けば「ハラールだ」という返事が返ってくる。しかし、大学院生のサウジアラビア人女性は、たまたま友人からインド料理店で使われている肉がハラールではないという情報を得た。それ以後、彼女はインド料理に対して疑いを抱くようになった。他のムスリムにもその情報を伝えたが、信じない人物も多かったという。そのため、誰かとインド料理店へ行くときにはベジタリアンかシーフードカレーしか頼まなくなった。

もうひとつの選択肢としてベジタリアン料理もある。ただし、アルコールを含む調味料が使われていることがあるため、ベジタリアン料理であっても必ずしもハラールとは限らない。例えば大学院生のアルジェリア人女性は、最初にベジタリアン料理店へ行った際、店員へ問い合わせをすることなく注文していた。しかし、彼女の友人のサウジアラビア人とインドネシア人の女性2人が店内のアレルギー表をチェックすると、ムスリムが食べることができるメニューは2品しかないと判断することもあった。

海産物は屠殺方法に関わらず食べることが許されているため、魚は最も手軽に食べることができる食品のひとつである。例えば定年退職している日本人のムスリムの男性は、基本的に焼き魚を食べているという。また、外食であれば寿司も選択肢のひとつとなる。なかでも回転寿司は入店の敷居が低いため人気である。ただし、シャリに使われる酢や寿司用の醤油が少々アルコールを含むため、許されていないと考えるムスリムもいれば、そう思わないムスリムもいる。寿司を食べる時にアルコール分が含まれていない醤油を持参するという事例も見られた。

日本料理の中でもう一つの選択肢は天井である。店員から「天井には酒や肉は入っていない」の返事を得てからサウジアラビア人女性とインドネシア人女性が頻繁に天井屋へ食べに行くようになった。ただし、そのタレにアルコールが含まれているのではないかと疑わしく思えたため、毎回「マイ醤油」を持って行き、天井にかけていた。しかし、2人がインドネシア人の大学院生に天井屋を勧めようとしようとしたとき、彼女は「その天井は豚肉と一緒に油を使っている」と言った。その後2人が改めて天井屋に行ってメニューをチェックしたところ、確実に豚肉の揚げ物も提供していることが分かったのでそこに行くことをやめたということもあった。

仙台名物の牛タンも食べることがあるが、ほとんどの店ではハラール認証を得ていない肉やアルコールを使用している。ただし、オーストラリア産のハラール牛タンを使用しハラール対応している牛タン店がかつて1軒あった。外食先のなかでインド料理以外の数少ない日本料理店であり、調査協力者たちは頻繁にこの牛タン店へ食べに行っていたが、2018年の夏に閉店してしまった。ハラール認証を得ているか否かを気にしない人物もおり、彼／彼女はそれ以外の牛タン屋へ頻繁に通っている。

肉が多く使用されるイメージの強い韓国料理店にもムスリムたちが通うことがある。韓国料理はサウジアラビア人女性の調査協力者の大好物であり、彼女はシェフから料理に肉と酒が入っていないメニューを教えてもらって以来、毎月のように通っている。彼女はトッポギ、チーズ明太ビビンバをよく注文していた。

このように、宮城県内に住むムスリムたちは自分たちで判断しながら新たな外食先を探している。ハラール認証を受けた飲食店だけでは選択肢が少なすぎるからであろう。また、「せっかく日本に来たのだから色々なものを食べてみたい」と語る人物もいた。イスラームの規範を守りつつも、様々な料理に挑戦しているのだ。

6. 地域社会とのつながりと東北へのまなざし

最後に、ムスリムたちと地域社会がどのようにつながっているのか明らかにしておきたい。留学生の場合、ICCSやTUMCAの参加するイベントが最も直接的に地域社会とつながる機会となっている。例えばムスリムたちが断食を行うラマダーン月の間、ICCSが主催する断食明けのパーティが毎週日曜日に行われている。断食明けのパーティでは週ごとに国別で料理の準備を担当している。食事は日の入りと共にムスリムたちが断食を終える際に、無料で提供される。ICCSは、イスラーム文化やムスリムの生活を体験できるよう、非ムスリムたちの参加も歓迎しており、同様に無料で食事を提供する。食事と礼拝をする部屋は男女で分かれており、ムスリムと非ムスリムを問わず食事をしながら交流する場となっている。宗教的実践を共有する場でもありながら、非ムスリムとの境界を取り払いつつ、宮城で暮らしている同性のムスリム間で情報を共有し、交流する場なのだ。

一方、技能実習生たちは東北家族を通じて地域社会とつながっている。東北家族の主催するイベントに、彼らを受け入れている会社の人びとが参加していたり、マスメディアが取材に来てい

ることはすでに述べた通りである。また「インドネシアが好き」という日本人もやって来るがあった。

さらに重要なのはインターネットテレビ局ariTVの役割である。仙台を拠点とするariTVは、東北の観光に関する情報等を発信している。そのなかでハラールの料理を提供する飲食店の情報も多く取り上げている。またムスリムたちのために断食月明けの集まりを企画するなどの支援も行っている。先述したTUMCAと副市長の対談もariTVの協力のもとで行われていた。ariTVの企画にはムスリムの留学生も参加している。さらに東北大学大学院の修了生で、現在ariTVで働く女性は、日本国内のハラール・フードに関する情報を発信するJapan Halal TVを立ち上げている。インターネットテレビ局はムスリムたちの組織を地域社会とつなぐハブの役割を果たしていると言えるだろう。

このように、組織単位でムスリムたちが地域社会とつながる機会は少なくないと言えるだろう。一方、個人単位でのつながりはムスリムに限定されることが多いようだ。例えば技能実習生は実習先から逃亡する可能性もあるために「会社の人以外の人間には気をつけなさい」という指示が出ていることもあると聞く。また留学生の場合は研究室に馴染めないということもあるようだ。

例えばサウジアラビア出身の大学院生Sさんは、彼女が所属する研究室において唯一の留学生であった。研究室の室員たちは、彼女の指導教官を除いて、あまり英語を喋らないという。それゆえ彼女は疎外感を感じていると話していた。例えば、室員たちは研究室内にSさんと2人きりである場合には話かけてくるのだが、それ以外の場合には、Sさんが話しかけても対して知らないふりをするのだという。研究室に配属された当初、Sさんは部屋に入るときに「おはようございます」や「こんにちは」といった挨拶を行っていた。しかし返事をもらうことは少なく、自分からもだんだん言わなくなっていったそうだ。筆者が「それは単にシャイだからなのではないか」とたずねると、Sさんは次のように語った。

そうじゃないよ。想像してみて。スーパーへ行った時、スタッフに聞きたいことがあったらどうする？私一人だと多分聞かないままだけど、あなたと一緒にだったり、誰かと一緒にいたりすれば話す勇気が出るでしょう？だからシャイとかではないのよ。

つまり、Sさんは「研究室では日本人ばかりいるのだから、勇気がなくて私に話しかけれないという訳ではないだろう」と言いたいのである。Sさんの発言からは、彼女が研究室の仲間と十分に打ち解けられていない様子を見て取れる。

二二 このような疎外感はSさんに限ったことではない。特に留学生たちは「どうやって日本人と仲良くなればよいのか分からない」と打ち明ける人物が何人もいた。技能実習生の場合は職場のほか、管理団体など周囲の人びとと関わる機会も多い。また中古車輸出業や食料品店を営む人びとはビジネスを通して交友関係を持つことも多いだろう。一方、学生はアルバイトなどをしていなければ研究室以外でのつながりは希薄になりがちである。そのため疎外感を感じるのだと考えられる。

ムスリム女性たちに日本へ来た理由を聞いたところ、次のような答えが返ってきた。「日本は安全な国」、「環境がいい」、「日本の大学の授業料は安くて世界ランキングも高い」というものである。また、「自分の出身地とまったく違う異文化を体験したいから、東アジアの国に留学へ行きたいと思った。東アジアのなかで一番留学に適している先進国と言うと日本しかない」、「欧米よりイスラームフォビア（イスラームに対する憎悪や恐怖症）の人が少ない」と話すムスリム女性もいた。しかし、彼女たちに「大学から卒業してからどうするのか」と尋ねると、「日本での生活はストレスが多いから母国に帰りたい」「日本人と本当の友達になるのは難しい」という。この点において、ハラール食や礼拝室を探す難しさなど信仰上の困難よりも、日本人や日本社会となじめないことが問題だと感じている傾向が強い。

興味深いのは、なかには疎外感の原因を「東北人」の特徴に求めることがある点だ。艾の調査協力者のムスリム女性は「仙台の日本人があまり『話したがらない』(not talkative)」という点について語る。Sさんが大阪と京都に旅行した時に、日本人が自発的に彼女たちに挨拶したり、道に迷っているときに周りの日本人が彼女たちを助けてくれたりしたことが何度もあったという。しかし、仙台では自発的に話をかけてくれる日本人はほんの少ししかないようだ。ここでの筆者の意図は「東北人は無口で、関西人はおしゃべりだ」という本質主義的な主張をすることではない。むしろ、ムスリム女性たちも「東北人は無口で、関西人はおしゃべりだ」というステレオタイプ認識しているということである。

一方でその「静けさ」を好意的に捉える場面も見られる。大学院入学前、Sさんは東京にある歯科大学と東北大学の両方に合格していた。最終的に東北大学に進学することを決めたのは、「仙台の生活費が安い」という経済的な理由のほか、「東京は人が多すぎる、仙台の方が学業に適している」と思ったためだという。Sさんは、仙台に来てから2年経った現在でも、その決定に後悔していないという。宮城県において周囲からの疎外感を感じている一方で、生活の「穏やかさ」は好意的に捉えているのである。

7. おわりに

宮城県に暮らすムスリムたちは、本稿の事例のなかで見てきたように、礼拝場所をめぐって、あるいは安心して食事する場所をめぐって多くの困難を抱えている。このような困難は宮城県内に住むムスリムの数が少ないために、彼らを取り巻く行政や職場・学校がまだまだ十分に対応しきれていないことに大部分は起因するものであろう。

ただし、彼／彼女らの日常的な生活について考察することで明らかになったのは、ムスリムたちがICCSやTUMCAといった組織を通じた働きかけや協同によってムスリムとしての生活を続けていることである。さらに、実習生の勤務先やインターネットテレビ局など、地域社会の協力も重要な役割を果たしている。このように組織が十分に機能したり、周囲の協力を得たりできているのは、宮城県内のムスリムの数が少ないためだと考えられる。すなわち少ないからこそ組織が会員たちの顔が見える範囲で機能し、また社会において少数派であるからこそ周囲の目に留ま

り協力を得られているのだ。また人数が多くなってくれば、KMISと東北家族のように分裂することで組織内の凝集力を高めるようなことも起こっている。

川口（2017：28）は、東北において外国人や外国につながる人びとが「少ない」ということが、翻って社会的なあらゆるマイノリティへの配慮がなされる端緒となる可能性について論じている。宮城県のムスリムたちも、「少ない」ことによってまとまり、かつ周囲からの協力を得られている。もちろん、少ないことは本稿で取り上げたSさんのように疎外感を抱く人びとを生む可能性がある。重要なのは「少なさ」を少数派への無関心へと向かわせることなく、協同への手がかりへと結びつけていくことなのであろう。

注

- 1 ICCSの歴史についてはラムダニ（2018）において詳述されている。本稿の記述もラムダニ（2018）に依拠している。
- 2 モスクのことをマスジドとも言う。

引用文献

荒木亮

2016「異国で信仰が問われるとき―再帰的近代化、あるいはイスラームのオブジェクト化に纏わる一試論」『人文学報』512（2）：123-138。

福田友子

2007「トランスナショナルな企業家たち―パキスタン人の中古車輸出業」樋口ほか編、『国境を越える―滞日ムスリム移民の社会学』、pp. 145-177、東京：青弓社。

服部美奈

2007「在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成―名古屋市における自助教育活動の事例から」『異文化コミュニケーション研究』19：1-28。

樋口直人、稲葉奈々子、丹野清人、福田友子、岡井宏文（編）

2007『国境を越える―滞日ムスリム移民の社会学』東京：青弓社。

樋口直人

2007「越境する食文化―滞日ムスリムのビジネスとハラール食品産業」樋口ほか編、『国境を越える―滞日ムスリム移民の社会学』、pp. 116-141、東京：青弓社。

法務省

2019a 「都道府県別 在留資格別 在留外国人（総数）」

(https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=24101212&tclass1=000001060399&stat_infid=000031832815)（2019年12月10日閲覧）。

2019b 「都道府県別 国籍・地域別 在留外国人」(https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=24101212&tclass1=000001060399&stat_infid=000031832814&result_back=1&cycle_facet=tclass1%3Acycle)（2019年12月10日閲覧）。

一
九

Indonesian Moslem Family in Sendai (KMI Sendai) and Tohoku University Muslim Cultural Association (TUMCA)

2019 Guide for Muslim in Sendai, Sendai: Indonesian Moslem Family in Sendai (KMI Sendai) and Tohoku University Muslim Cultural Association (TUMCA) .

じゃかるた新聞

2019a（2月20日）『「実習生モスク」開設へ 気仙沼の飲食店横丁 祈りと交流の場に』(<https://www.jakartashimbun.com/free/detail/46390.html>)（2019年12月30日閲覧）。

2019b (3月21日)「実習生、支え合い10年 在日インドネシア人 『東北家族』に600人」(<https://www.jakartashimbun.com/free/detail/46390.html>) (2019年12月30日閲覧)。

川口幸大

2017「序—東北から多文化社会を考える」『東北文化研究室紀要』59: 19-34。

工藤正子

2008『越境の人類学—在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京: 東京大学出版会。

宮城労働局

2019「プレスリリース」(<https://site.mhlw.go.jp/miyagi-roudoukyoku/content/contents/000375510.pdf>) (2019年12月30日閲覧)。

西川慧

2012「在日インドネシア人ムスリムの『つながり』と『へだたり』」『東北人類学論壇』11: 26-43。

岡井宏文

2007「イスラーム・ネットワークの誕生—モスクの設立とイスラーム活動」樋口ほか編、『国境を越える—滞日ムスリム移民の社会学』、pp. 178-209、東京: 青弓社。

大澤広嗣

2019「外来宗教の法人化について—イスラーム教関係の一般社団法人と宗教法人」公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター編『日本における外来宗教の広がり—21世紀の展開を中心に』、pp. 37-61、東京: 公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター。

ラムダニ、アンディ・ホリック

2018「仙台市における東北大学ムスリム留学生の一日五回礼拝の実態調査」『東北宗教学』14: 127-151。

仙台市

2019「2-9.国籍・地域別外国人住民人口」

(<https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/tokesho/h30-01/02.html>) (2019年12月10日閲覧)。

店田広文

2015『日本のモスク—滞在ムスリムの社会的活動』東京: 山川出版社。

店田広文、岡井宏文

2015「日本のイスラーム: ムスリム・コミュニティの現状と課題」『宗務時報』119: 1-22。

東北大学

2019「外国人留学生数」(<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/overseas/overseas/02/overseas0203/>) (2019年12月10日閲覧)。